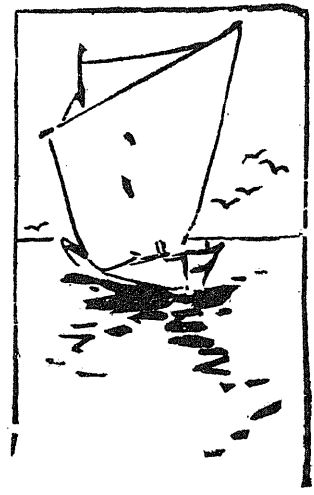

若葉もる夕月の影のをかしきに
きて見よと人々のうながしけれ
ば行きてしばし語りけるをり

平野後子

いつしかに青葉しけりて夕月の
ひまもる影も夏めきにけり

花の香に霞みし春はきのふにて
若葉をてらす月のすゝしさ

いくさ人汐路にくかに仰くらん
利鎌に似たるゆふ月のかけ

首夏山

佐保山も龍田のやまも夏くれは
ひとつ緑のいろにいてつゝ

山家水

なとか世に急きいつらん隠れすむ
山ふところの谷のましみつ

鏡

星うつり物こそかはれますかゝみ
清き心はくもる世わらめや

新樹の蔭に佇みて

雨峰生

若葉銀杏のさまみれば
ゆあみぜしかと思ふまで
濃き綠葉のしたゝりて
色衣手を染めんとす

うれしきはこの木下かな
苔の蒸したる碑は
かつては世にも新墓の
それと涙のそゝがれて

思出つらき目標と
知られしあとをかすかにて
今は無緣の石文に

ふりむく人もたえはてぬ

たゞ年毎に一もとの
銀杏ぞ春の初めより
塚をば守る人のごと
かへぬ姿を示しける

人移りゆき星變り
昨日みし世は今日ならず
仇なるえにし浮雲の
世の眞相をばきみゆきて

初夏のいまことさらに
笑みを湛えて塚まもる
新樹の銀杏いき〳〵と

情をこめて茂るかや

石文汝よねかはくは
雨風ふきて幾とせを
ねむりて狹く暮すとも
銀杏のふかき情には

千代萬世も變りなく
やすく此の世を送れがし
朽ちて竈の灰となり
煙りと消ゆる其迄に

友に答へて

君かつれなきことの葉を
きくたび毎に言葉なし

そは何故と云ひわかず
狹き胸をば痛めつゝ

例へばうすき皮はぎて
造りいてたる皷かな
強く撲なば破やせん
弱くは響わかざらむ

生れしえにしかへりみば
幸なきわれとなかんかな
頰に笑みをばつくれとも
衣うつくしくかざれとも

さかなき人のさけすみて
語るをきけばわか胸の

波しづかなるひまもなし
世はかくありとしりつれど

あはれ光明の御國をば
たゞひとすじに望めかし
心にかけてたのめかし
荒む世のかぜあらくとも

兒童の個性

松本孝次郎

個性といふことは委しく云へば個人性といふことである。即ち人は各特性を有つて居て幾分か異つて居る處がありますが、兒童もまた早くから已に各特別の性質を有つて居る。之を兒童の個性又は個人性といふのである。

心理學で人の心の話を聞いたり、教育學の方で教育の話を聞くのは共通の場合に付いての話を聞くのであるから、是等の人が實際教育の任に當つて見ると、學理の通りに行かぬものであるといふことを知る。何故學理の通りに行かぬかといふに凡て兒童は各個性といふものを有て居るからである、故に教育者は個人性といふことに注意を怠つてはならぬ、そこで個性に付て如何なることを心得て居らねばならぬかといふに先づ個性は如何にして生ずるかといふことである。

家庭の異るに從つて各異つて居る個性を生ずといふことは勿論であるが同じ家庭に居る兄弟でも同じ精神を有つことは出來ぬ。この原因の主なるものが三つある。

一、身体的の要素